

タマネギ細菌性病害の本圃^ほにおける防除対策

淡路地域で多発しているタマネギ細菌性病害について発生要因と防除対策を検討したところ、ネギアザミウマの多発によって本病害が媒介されることはなく、機械収穫による貯蔵中に発病が増加しないことが分かった。薬剤防除では、カセット水和剤を中心とした体系防除が有効であった。

内容

淡路地域で発生するタマネギの細菌性病害は、主に腐敗病と軟腐病である。本病害は、多発すると立毛中（写真左）の発病だけでなく、収穫後の貯蔵中にも発生する（写真右）。そのため、病害発生による減収も大きい、クレームによる産地のイメージダウンも被害の一つとなっている。

本病の多発要因として、生産現場からネギアザミウマによる本病の媒介や機械収穫の影響が疑われた。そこで、室内試験においてネギアザミウマが増殖したタマネギ苗に細菌性病害の病原細菌（*Pantoea ananatis*）を噴霧接種したところ、発病は認められなかった（データ省略）。次に、機械収穫による貯蔵中の発病への影響を検討したところ、機械収穫区と慣行区の発病球率はそれぞれ29.8及び30.6%と差は認められず、機械収穫の悪影響はなかった。本病発生と気象の関係について

は現在解析中である。

薬剤防除体系を検討したところ、慣行のストレプトマイシン液剤及びバリダマイシン液剤の交互散布の防除体系のうちのいずれかを、カセット水和剤に変更した体系防除を検討した。その結果、いずれの区も慣行区よりも防除効果が高く、カセット水和剤を中心とした体系防除が有効であることが分かった（図）。

普及上の注意事項

本病害の防除対策は育苗時から体系的に行う必要があるため、健苗育成に努めることが重要である。機械収穫による貯蔵性への悪影響は高くないが、収穫時に既発病球を収穫・貯蔵することによる影響は考えられるため、収穫時に発病球を除去することが重要である。

西口 真嗣（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）



写真 タマネギの細菌性病害

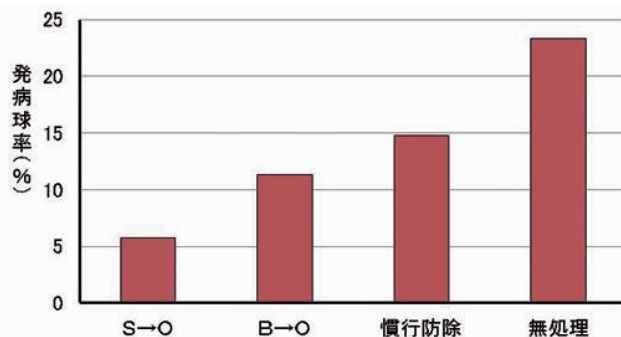


図 薬剤体系防除によるタマネギ細菌性病害の防除効果

注) S: ストレプトマイシン水和剤、B: バリダマイシン液剤、O: カセット水和剤
慣行防除はB→S→B→S→Bの体系防除
品種「ターザン」をコンテナ貯蔵後8月14日に発病球率を調査